

大正時代の外来語—固有名詞を中心として—

お茶の水女子大学大学院生 石井久美子

外来語研究といえば、明治期や昭和期を対象としたものが多く、大正期には、外来語が急増し日常語化したと指摘されてきたが、その実態はよくわかっていない。そこで本発表では、総合雑誌である『中央公論』の「公論」と題する記事群を資料として、大正期の外来語、特に固有名詞である地名と人名について取り上げる。

まず、地名については、数が少ないながらも、主要国を中心に研究がなされてきた。そこで、本発表では、「英」「佛」などの略称表記も対象にすること、そして地名を含む混種語という単位で捉えることを試みた。そうすると、「東歐羅巴」「歐羅巴大陸」のような地域名や地形名のほか、「亞米利加化せられ」のように地名が動詞の一部となっているものや、「獨逸魂」「英國紳士」のように一般名詞として用いられているものなどが見られる。

人名については、地名とは対照的に、先行研究が非常に少ない。そこで、人名の特徴を分析するとともに、人名を含む混種語を調査することとした。混種語には、「ビスマルク公」といった敬称のついているものや「ウイルソン大統領」といった身分を表す語を付しているものから、「カイゼル鬚」といった一般名詞まで見られる。

地名と人名は、翻訳による書き換えが難しいが、外国の情報を語る上で欠かせない要素である。そして、混種語は、最も日本語化されていることを証明する要素の一つであるといわれる。つまり、大正期に急増したといわれる外来語の中身も一様ではないといえる。固有名詞が和語や漢語と結びつくと、事物を端的に示すだけでなく、品詞や意味領域を変えて使用の幅を広げる。それは、情報の付加である一方で、固有名詞の持つイメージの固定化につながっているということを立証する。